

性犯罪調書 汚された女性たち 第五話

〔 監禁排泄・後編 〕

制作／人工美少女製作所

ふあつとぎゃつとDX

序章 メス結合

——今、私の肛門は、あかねの膣と繋がっている——

あかねを助け出すはずだった私だが、結局は犯人の手に落ちてしまったのだ。

「あかね……いくよ……?」

「イ、イヤア……! やめてあやね……考え直してえ……っ!」

(これはあの男の命令なんだ……だから——)

そう自分に言い訳し、腹部に力を込める。

「ビビ、嫌に素直だなあ……? もっと抵抗すると思ったが……」

「まあいい……やれ——」

(ごめん……あかね……)

——ブツ! ビチビチビチイイイツ!!

「ンンンンンンンンンンンンンンンツ!!」

「イヤアアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!」

——ポピツ! ブツ! ビチビチビチイイイツ!! ブビイイツ!!

どんどんあかねの膣内に流れ込んでいくうんち……。

それはすぐに限界を超えて――。

――ブチィッ!!

あかねの女の子が終わった音がした――

第一章 潜入

――ここだ。

携帯の電波も途切れがちな山奥。

GPSの発信記録はこの付近で途切れている。

(きっとこの近くにあかねがいるはず……)

私は道路脇にパトカーを止め、辺りを見回した。

すると、ひっそりと獣道のようなものがあることに気づく。

草木が踏み倒されており、明らかに人の立ち入った形跡があった。

(なんか怪しい……行ってみよう……)

道なりに進むと、木々のない開けた場所に出た。

廃墟……廃工場だろうか？

そこには、既に打ち捨てられたと思われる寂れた建物があった。

(ここかも……調べてみないと……!)

入り口と思しき扉には南京錠……。

サビだらけの中、錠前だけが煌々と輝いている。

(管理されてる……? こんな廃屋が……? それとも……)

もちろん鍵などない、ここは……。

(やったことないけど……ピッキング出来るかな……?)

先輩から聞きかじっただけの知識が、役立つかもしれない。

私は前髪を留めているヘアピンを抜き、錠穴へと差し込んだ。

——カチャッ……カチャッ……カチャッ……。

——カチッ!

(開いた——!)

見様見真似ですらない稚拙な手付きだったが、案外うまくいくものだ。

——カチャン……。

音を立てないように慎重に南京錠を外し、そっと地面に置いた。

——ギィィ……!

極力音を立てないように開けたつもりでも、錆びついたドアは思いの外鳴り響く。

(誰もいない……?)

私は扉の裏で様子を覗いたが、誰も出てくる気配はない。

大丈夫だと判断し、恐る恐る扉の中を覗き込んだ——

第二章 発見

(——あかねっ!?)

雑然とした屋内。

その中に、一際目立つ檻が鎮座していた。

そしてその中に倒れ込んでいるのは、私が探し求めていた人だったのだ!

周囲を確認し、誰もいないことを確かめた私は、急いであかねの元へ駆け寄る。

あかねの首には首輪が着けられ、そこから伸びた鎖は檻へと繋がれていた。

「あかねっ……!! 大丈夫……!!? あかねっ!!?」

声を抑えてなどいられなかった、必死にあかねに声をかける。

「あ……やね……?」

声に気づき、あかねが覚醒する。

両手両足を拘束されているあかねは、芋虫のようにこちらにズリズリと這いずって来た。

「あ、あやねっ！ 助けに来てくれたのね……！」

「ありがとうっ！ よく、ここがわかったわね」

追跡アプリを無断でインストールしたことは、あかねには知られなくなかった……。だから私は、あかねから目を逸らそうとして――。

(えっ――!? なに……これ……?)

――あかねから目を逸らせない……正確には……あかねの瞳から――

「どうしたの？ あやね……？」

あかねの呼びかけにも答えられない。

私の目は、あかねの瞳の中の奇妙な紋様に釘付けになっている……。

(コ、コンタクト……？ で、でもあかねの視力は――)

どんだん頭の中がぐちゃぐちゃになり、意識が薄れていく……。

「あやねっ！ しっかりしてっ――!?」

その呼びかけを最後に、私の意識は途切れた――

第三章 捕獲

「――んんう……」

あれからどれぐらい経っただろう……私はぼんやりと意識を取り戻しつつあった。

「あやねっ！ 気づいたのっ!?」

あかねの呼びかけの声――。

「――ッ!?」

――ジャラッ！

とっさに起き上がろうとして、動けないことに気づく。

(くっ……手足が……っ!?)

いつの間にか、手足があかねと同じように拘束されていた。

「——ヒヒッ！ やつと起きたか」

頭上から聞こえる声——顔を上げた先には——。

(えっ——？ 警官……!?)

「そっ、そいつが真鍋信也まなべしんやだったのっ……！ 例の連続誘拐監禁事件の犯人よ！」

叫ぶあかね。

「——えっ!? こいつがっ!? で、でも顔が……」

署内でも人気の高い、あの凛々しい青年とは似ても似つかない人相。

醜く歪んだその顔は、とても同一人物とは思えない。

「ヒヒッ！ 無理もねえ、俺は二重人格ってやつでさあ……顔まで変わっちゃまうんだ」

「昔、親父の野郎にこっ酷くやられたおかげでよお……ま、信也の奴は知らねえがな、ヒヒ！」

虐待による二重人格……あり得ることだが、人相まで変わるとは……。

「しばらくは二人仲良く、そこで暮らすんだな」

「くうっ……！」

今や私もあかねと同じ檻の中……服も脱がされ下着姿にされている……。

万事休す……出来ることは何もなかった——

第四章 百合

「さて、感動の再開祝いに、ワンプレイしようじゃないか……ヒヒッ！」

——ガチャンッ。

「出る」

——グッ！ ジャラッ！ ジャラッ！

「キャッ！」

「ちよっと！ 引っ張らないでっ！」

男に強引に首輪に繋がった鎖を引かれ、抗議の言葉を上げる私。私とあかねはそのまま檻の外まで引っぱられていった。

「よし、足の拘束だけ外してやる、ほら——」

——カチャッ……カチャッ……。

両足だけ自由になったものの、依然として両手は後ろ手に拘束されたまま……。

「な、なによ……一体何させるつもり？」

わざわざ檻から出したということは、なにか目的があるはずだ。

そう、きつといかかわしい目的が——。

「ビビ、シックスサインだ。お互いのマンコを舐め合え」

「これは準備だ。やらないと後で痛い目を見るぞ」

拒否してもよかったが、そうしても状況が悪化するだけのように思えた。

「あかね……」

視線を合わせたあかねがゴクリと頷く……あかねも同じ考えのようだ。

——ジャラッ……。

仰向けになったあかねの上に、足を広げて跨る。

目の前にあかねのオマンコ……。

タイトと下着はその部分だけ綺麗に切り取られていた。

——ゴクリ……。

初めて近くで見るあかねの秘所に、生唾を飲み込んでしまった。

「あかね……いい……いい……？」

「うん……いいよ……あやね」

お互いの秘所を舐め回す確認だ。

それを聞いた私は、そつとあかねの割れ目に、舌を伸ばした——。

——くちゅっ……。

「あっ♥」

「ご、ごめん、あかね！ 痛かった？」

「う、ううん！ 大丈夫、そのままして……」

初めて聞くあかねの声だった。

それは熱を帯びた妖艶な……。

——ぴちゃっ……ぴちゃっ……。

「んっ……んっ……」

まず外側を濡らし、慣らしてから中に侵入させる……。

あかねの中は温かくて……とろけそうなくらい柔らかかった……。

（——あっ♡）

あかねも私のタテスジを刺激し始めた。

私はまだショーツを履いているので、その上からそっと……。

——ぴちゃっ……ぴちゃっ……ぴちゃっ……。

「んっ♡ あっ♡ はあっ♡」

そうやってしばらく刺激し合っていると、あかねの声色が切羽詰まったものになってきた。

——もうイクのだ——私の舌で——

「イクッ！ イックウウウウッ！！♡♡」

——プシッ！

「んぶっ……んぶっ……」

身体をビクンと震わせて、あかねは絶頂に達した。

あかねの噴いた潮が目に入り、目をつむる。

しかし手は拘束されているので、目を拭うこともできない。

仕方なく私はしばらく目を閉じていることにした。

結局、イッたのはあかねだけだった……私のおまんこは中途半端に高められたまま放置……。

口の中で転がしているあかねの潮を残して——。

「ヒヒッ！ イッたのは片方だけか、まあいい……十分濡れただろ」

たしかに、私もイカないまでも、しっかりと割れ目は濡れそぼっていた。

「よし、本番だ——」

それからが地獄の始まりだった——

——続きは製品版でお楽しみ下さい。